

テイルズオブゼスティリア～光の巨人伝～

ジャスサンド

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

穢れによって生まれる憑魔や憑魔獣により世界は汚染しつつあった。

そんな世を救うべく立ち上がったのは導師の宿命を背負った若き人間の少年と光の力を宿した巨人だった。

※この作品はテイルズオブゼスティリアとウルトラマンティガのクロスオーバー作品です。

目次

第1話	光との邂逅	1
第2話	憩いの時間	11

第1話 光との邂逅

ある時、ある山脈の麓に広がる森で戦いが行われていた。

しかし戦いと言ってもただの人間同士の争いとは質が桁違いにかけ離れている。

それは50mはあるであろう高さを誇る者同士の戦い。

赤と紫に銀の三色に配色が分かれた身体を持ち、青緑の雫に似た形状の結晶を囲むように胸から肩にかけて金色のラインが伸びるプロテクター。

そして乳白色に輝く目に物静かな闘争心を秘めた巨人はまさに神々しい存在感に満ちていた。

巨人に対するは白銀の皮膚と水牛の顎角を二つ生やした怪獣と黒の皮膚と鋭利な一本角を生やした怪獣。

「チャア！」

巨人の水平撃ちが白銀の怪獣の喉元にめり込み、そのままパンチを懐に撃ち込む。

もろに急所に入ったはずだが白銀の怪獣はびくともせず巨人の頭部を左の剛腕で殴りつける。

重たい一撃を頭にもらった巨人はよろけ、そこに黄金の怪獣が雷撃を放ち避ける間もなくその身に浴びてしまう。

「チャアアア」

並みの人間ならば一瞬ももたず焼き焦げてしまう一撃。

それでもなお巨人は闘う意思を捨てず二体の怪獣に向き直る。

またしても放出する黄金の怪獣の電撃を巨人は両手に発生させた虹色の障壁で完全に受け止め、電撃が消失したと同時に前方へ飛ぶ。

「ハッ！」

飛び蹴りを受けた黄金の怪獣はその蹴撃に態勢を崩し、地響きを鳴り響かせ地べたに這いつくばる。

足技を決めた巨人は華麗な身のこなしで着地するとこちらに敵意の眼差しを露にする白銀の怪獣へ、狙いを切り替えた。

白銀の怪獣と巨人は正面からぶつかり合い、掌を重ね力勝負になる。

ぎゅるりと逞しい腕から湧き出る腕力が手を苦しめ、巨人はじわじわ苦痛を感じ始めていた。

しかし巨人の額にあるクリスタルが赤く明滅した一秒にも満たない瞬間、巨人の身体は赤く変色し白銀の怪獣を押しやる。

「ジャアアア！」

そのまま巨人は白銀の怪獣を背負い地面に容赦なく投げ捨てる。

背面を強打した怪獣に構わず巨人は殴る蹴るの猛攻を加えていき、背中から襲いかかる黄金の怪獣すらも裏拳で片手間に蹴散らす。

「フツ…」

今度は巨人の胸部のクリスタルが赤く明滅し危険信号のように、ピコンピコンけたましく鳴り止まずにいる。

その点滅をチャンスと捉えたのか白銀の怪獣は土を削って逃亡を図ろうと試みたが、姿を隠せる深さまで辿り着く前に巨人に尻尾をがっしりと掴み取られてしまう。

姿が赤になった途端パワーが急激に向上した巨人は円回転を行い、白銀の怪獣をもその動きに巻き込む。

回転に目を回す白銀の怪獣をある程度疲労させたところで巨人は手を放すと、怪獣は木々をへし折りながらうつ伏せに倒れる。

「ハアア…ハッ！」

巨人は両腕で弧を描き胸元に固定する。

両手を開いた空間には超高熱エネルギーを圧縮した球体が具現化し、腕を振りかぶって白銀の怪獣目掛けて投げつける。

光球を食らった白銀の怪獣は身体が崩れ去り、青白い粒子となり空へ消えた。

残るは黄金の怪獣のみ。

『グルウウ』

相棒を倒された黄金の怪獣は怒りのままに雷撃をやたらめつたらに放出し、周囲の木々や土砂を焼き付くしていく。

法則性のない雷撃が足元を穿つ中、巨人は怯えず両腕を額のクリスタルの手前でクロスする。

クリスタルが紫に発光し、その身体が今度は紫と銀の二色に変化した。

巨人は足を踏み出し雷撃を俊敏に一発も直撃することがなくかわしながら、間合いを詰め手刀と蹴り技を交互に決め込む。

赤い姿の時より一発一発の効き目は薄いようだが、その点を格段に羽上がったスピードで補うことでより多くの攻撃を叩きつけられるのだ。

「ジュア！」

回し蹴りを腹部に命中させた巨人は両腕を左右に伸ばし、尖った頭の上でピタリと掌を重ねエネルギーを集約。

一定値まで高まったエネルギーを腕ごと左腰に構え、右腕で手早く放つ。

「テヤッ！」

光弾の形状をしたエネルギーは黄金の怪獣の中心部を貫き、白銀の怪獣と同じように青白い粒子となり霧散させた。

二体の怪獣を撃破した巨人は体力が消耗したのか片膝を付いて体を上下に揺らす。

そして頭から足先に至るまで透明になり、その巨大な姿が元の形を失った森に消えた。

「う……ああ……はぁ……」

二体同時に相手にしたおかげでいつも以上に力を消耗してしまっただ。

これまでも数多くの敵を倒してきたがここまで体力を使い果たしたのは初めてだ。

いつまた次の敵が現れるか分からないというのに、逃げるための余力すら今の自分には残されていない。

—このままでは危険だ
歩き出そうにも脚がガクガク震え、視点も定まらず体がふらつく。
土からはみ出た根っこに足元を取られ、踏ん張る気力もなく転倒してしまう。

もう立ち上がるのも馬鹿らしくなってくる程に意識が朦朧となっていた。

—こんな無人の薄暗い森の中で力尽きるとは情けない

録に身動きできない自分に心底愛想が つきた。

徐々に頭がぼうつとしだし、やがて彼は意識を暗闇の底に無意識の内に手放した。

意識が蘇ると、視界には焦げ茶の木目が映りこんだ。数秒で視力が回復しそれが室内の天井に当たる部分だと分かると、僅かに何かが弾ける音が鼓膜に響く。

不規則に聞こえ視界の端でゆらりゆらりと揺らめく暖色系の色から、おそらく焚き火辺りの炎だろう。

どうやらここはさつきまでいた森の中ではないらしい。そう結論を出した時、自分にかけてられた毛布に視線が行き腰だけを上げてそれを軽く手に取った。

「う……これは……一体誰がこんなことを？」

纏まらない思考を巡らせつつ何故自分が薄暗い森ではなく、ここにいるのか推察する。

まず第一にこの毛布は自分の所有物ではない。

なら他の何者かの物ということになる。そしてその存在が自分ここに寝かせ、毛布をかけてくれたということになる。

その正体が何なのか気になりだしたところに自分以外の存在を知らせる声が聞こえてきた。

「あらお目覚めになられたようですわ」

「ああそのようだ」

室外へ通じる出入口から一組の男女が歩み寄ってくる。

年若い黒髪の青年と白い長髪の女性の組み合わせだ。

「気分はどうだろうか？どこか不調なところはあるかい？」

「大丈夫……です。たぶん、今のところ」

「そうか、それは何よりだ」

男はこちらの無事を直接聞いて安心したのか、安堵の表情を浮かべにこやかに笑う。

付き添っている女性も彼につられて同じように微笑みを向けてくる。

「助けていただいて感謝します。あなた方は？僕が見えるということ
は…」

「君の想像は半分正解で半分はずれだ。私はミケル、人間で今は導師
として活動している。彼女はライラ、彼女は火を司る天族で私の主神
として共に穢れを浄化するための旅をしている」

ライラと紹介された女性はミケルが名を言ったために代わりに会釈
をする。

天族とは人間の間では清き崇められるべきものとしてその種族名
が広まっている。

人間にはその姿は捉えられず世に蔓延する穢れや災厄から聖なる
加護の元に、人間や街を守護している守り人の役割を担っている不可
思議な存在。自分もその一部だ。

そして

「導師：天族と繋がり穢れと憑魔を浄化する伝承上の存在、まさか本
当に実在するとは」

「まだ新米だが、それより君のことも聞かせてくれないか？」

「先程森で憑魔獣と戦い浄化した光の巨人：その巨人は貴方なのです
わね？」

ミケルとライラからは邪な気を感じない。

素直に頷き口を開いた。

「そうです、お二人が見たあの巨人は僕です」

「やはりそうでしたのね。巨人が姿を消した付近に貴方が倒れていら
したのでもしやと思ったのですが」

「たまたま通りがかっただけだが戦いを見させてもらった。憑魔獣を

それも二体を同時に相手に浄化してしまうとは見上げたものだ。正直感嘆させられたよ、あのような戦いは私にはできない」

「ミケル様はまだ導師になられたばかりですから。これからの旅で強くなる可能性はありますわ」

「だが穢れはスゴい。これまでの憑魔や憑魔獣との戦いでも何度自らの無力さを痛感したとか」

「—あの、一つ聞いてもいいですか？憑魔獣って何なんですか？」

彼らの会話に度々出てくる憑魔獣なる単語に覚えがないため、申し訳ないながらも唐突に質問させてもらったのだが二人はこちらを振り向き目を丸くしていた。

こちらから飛び出た質問がまるで想定外であつたかのように。

暫し静まる空気に痛まれず二人に恐る恐る訊ねてしまう。

「えっと…ごめんなさい…変なこと、聞きましたか？」

「…いえそんなことはございません！」

「こちらこそ申し訳ない。しかし驚いた、憑魔獣を知らずに浄化していたとは、てつきり私たちより精通しているとばかり思い込んでいた…」

二人の反応からやはり自分の質問はというよりは、憑魔獣を浄化していないながらその存在を知らない自分はおかしいようだ。

しかし最初こそ驚いていたもののライラとミケルは嫌な顔を微塵も見せず、丁寧に解説してくれた。

「憑魔が人の悪意や悲しみといった負の感情から生まれる穢れから生み出された存在であることはご存知だと思います。その憑魔が破滅の使徒とされるドラゴンと同等の巨大さと穢れを持った憑魔の上級にあたる存在、それが憑魔獣です」

「話したように私たちも穢れを浄化するのが目的である故に憑魔獣との戦いは避けられない。だがその強さは憑魔の数倍は上回っていた

：ライラとの神衣かむいであつても苦戦を強いられる程に手強い相手だつた：私がつと強くければ救えたはずの命も少なくなかつた：」

ミケルは歯噛みし強く噛んだせいで唇から血が滲んでいた。

彼の様子と言葉から察するに、過去に憑魔獣との戦いで失つた命があつたのだろう。

その際に彼が味わつた苦しみは想像に固くない。

「恥を承知で君にお願いしたい。私の：導師としての旅に同行してくれないか？」

「僕が：ですか？」

「君のその力は今の私には必要なのだ。今の私ではこれから先も憑魔獣の力には苦戦を余儀なくされるだろう：私の使命を達成するためにも君の協力を得られたら非常に心強いと思つている。頼む、どうか私たちに力を貸してはくれないだろうか」

「私からもお願いします。私だけではミケル様の助けになることができませぬ：貴方が同行してくださればミケル様も私もとても助かります」

そう言つて二人は揃つて頭を下げてくる。

思いがけない申し出だが、断るはつきりとした理由はない。

それに今回は助けてもらったから幸いだったが、一人ではいつしか先程のような状況に陥つた時身が危ないし、何より単純に自分の力が役に立つのなら二人の助けになりたいというのが本心にあつた。

今だに頭を上げずにいる二人を安心させる声色でその申し出を受け入れる。

「喜んで受けさせてもらいます。ミケルさんライラさん」

「おお、感謝する！」

「ありがとうございます。これからの旅の楽しみが増えましたわ」

二人の喜びように若干困惑するもすぐに笑ってそれに応える。

「ではさっそく陪神契約に入ろう。ライラ」

「はい、では手を私の掌に置いてください」

ミケルの指示を受けたライラはこちらに歩み、手を差し出す。それが何を意味するのか知識としてはあったが、実際に実践するのは初めてだ。

何処からか沸き上がる緊張に蝕まれながら言われた通りに彼女の掌に右手を乗せると、ライラを中心に銀の魔方陣が広がる。

「静謐なる流れに連なり生まれし者よ。今契りを交わし我が煌々なる猛り、清浄へ至る輝きの一助とならん」

慣れた口調で詠唱の句を唱えるライラとその作業をじつと見守る。

「汝承諾の意志あらばその名を告げよ」

締めの部分に入り自らの名―真名を風に乗せるように柔らかくそれでいて自分の意志の強さを示すためにも強調して呟く。

それで終わりだった。

「これでいいの?」

「ええ契約は無事完了しました」

「これからよろしく願います。そういえば君の名は何と呼べいいだろう?」

今更ながらミケルの問いでまだ自分が名前を告げていなかったと気付く。

毛布を畳みミケルに返し、しっかりとその瞳を見つめる。

「テイガです」

「改めてミケルだ。これからよろしく頼む」

第2話 憩いの時間

『アハハアハハアハハ』

ティガとミケル、ライラはこの日も憑魔や憑魔獣を相手に戦闘を繰り広げていた。

敵対する彼らを小馬鹿にしたような奇声で笑うのは憑魔獣メンジユラ。

二体の同じ怪物が中央の結合部で繋がり一つの大きな体を持ったような姿の憑魔獣で侮れない相手だ。

「ジユア！」

巨大化したティガが打ち下ろした右拳がメンジユラの銀色の方にクリーンヒット。

ティガは反対側の金の方の攻撃を食らうより早くに蹴りを浴びせ、怯ませる。

「チャア！」

続けざまに踵落としを金色の頭に叩き落とし、体が連結しているせいで銀色の方も連動して仰け反ってしまう。

しかしメンジユラもやられてばかりではなかった。

連結部が消え分裂したメンジユラは、二体でティガの出口を塞ぐように周りを動き回る。

銀色の突撃を受け止めるティガの無防備な背中を狙い金色のメンジユラが、体を小刻みに震わせ何らかのアクションを始めようとしていた。

『ミケル様！』

「わかっている！」

ライラとの神依を展開していたミケルは二体に挟み込まれるティガに叫び、跳び上がり大剣を横一閃に切りつける。

「ティガ！こちらは任せてくれ」

その言葉にティガは深く頷き肯定の意を見せる。

ミケルの一太刀により分散したメンジユラの銀色の片割れをティガは請け負う。

長く伸びた角を突き刺してくるメンジユラの突進をすれすれでかわし、背後に抜けるメンジユラに視線をくれずに蹴り飛ばす。

『ギャハハハハハ』

相も変わらず笑い声を上げるメンジユラ。

効いているのか効いていないのか検討しにくく、やりづらさを感じながらもティガは追撃を続ける。

『ハハハハハハ』

金のメンジユラを相手に闘うミケルもティガと同じく苦戦を強いられていた。

金色の攻撃手段は二本の角同士を重ね合わせその先端から炎を噴射する遠距離攻撃。

リーチが限定される大剣で厳しい敵だ。

だがそんな程度で根が折れるようでは導師は務まらない。

導師として憑魔等と戦ってきた経験が活きているのか炎を並外れた身体能力で避け、無駄な動きをせずにミケルは確実に距離を縮めていく。

「燃ゆる弧月！」

大剣に灯した炎が弧を描いてメンジユラ目掛けて宙を横切り、爆散。

メンジユラは被弾した腹を両腕で抑えながら痛みを堪えるようにあたふたと跳び跳ねる。

ティガも牽制のために威力を低くした光弾ハンドスラッシュを撃ち、速効性のある青き水平の光弾はメンジユラの首にあたる部位で爆発した。

「キャハハハキャハハハハハ」

狂ったように負傷しても変わらずに笑うメンジユラにティガもミケルも今までの憑魔にない不気味さがないしん寒気がするも、そんな場合ではないのは百も承知。

双方がメンジユラにダメージを蓄積していき、次第に反撃の色が薄くなる。

その瞬間二人はメンジユラを攻撃し弾き飛ばし銀と金のメンジユラは、最初とは異なった背中合わせの状態で密着してしまう。

『キャハハハハハハハ』

阿吽の呼吸とも呼ぶべき連携を見せた二人によって、異常事態に陥ったメンジユラはどうにか打開を試みるも互いに別々の敵に向かおうとするために足の引つ張りあいになってしまっている。

ティガは額の全面で両腕を交差させ、下に振り下ろすと赤の要素がなくなり紫と銀の二色の姿へ瞬時に変化した。

ティガの特殊能力タイプチェンジ。敵や状況に最も適した能力を持つ姿に変身する能力だ。

今この紫の姿は俊敏なスピードを引き出す能力に長けたスカイタイプと名の形態で、他にも後二つの形態がある。

銀・赤・紫の体色でスピードも力も平均的な能力な基本形態マルチタイプとパワーが格段に上がる代わりにスピードを犠牲にする赤い形態パワータイプ。

ティガはこれらの三つの形態を使い分けて闘うことができる。

スカイタイプとなったティガはメンジユラの上空に冷気を放ち、拡散したそれがたちまちメンジユラを凍結させ動きが完全に沈黙する。

ミケルとティガは領き合いそれぞれとどめの術技を命中させた。

「ハアア、チャー！」

『『バーニングエコー！』』

スカイタイプの必殺技ランバルト光弾と神依化したミケルとライラの火炎術が、氷像と化したメンジユラを穿ち塵も残さず焼き尽くす。

メンジユラが消滅し周辺の嫌な気が知覚できなくなったのを確認したミケルはライラとの神依を解除し、ティガも変身を解き元の天族としての姿に戻る。

紫の瞳に少しかかった銀髪を気にも留めずティガはミケルと言葉を交わす。

「この辺りはこれで充分だね」

「あああの憑魔獣で終わりだ。穢れは完全に消えたようだ、成果は上々だ」

「お二人共そろそろ街に戻りませんか？もう半日中穢れを浄化し回っておりますし」

「む、もうそんなに時間が過ぎていたのか」

「言われてみれば確かにずっと憑魔と戦ってばかりだったね。でも…まだもう少しぐらいなら行けそうな気がするけど」

「私もだ」

「お二人がおかしいだけですわ」

平然と言つてのける二人の反応にさしものライラも苦い笑いしかできない。

活動時間が延びたのは導師として成長したということであり、主神であり仕える身のライラとしても非常に喜ばしいのだが小休止なしで半日も浄化を行うのは無茶苦茶だ。

ライラとテイガ、二人の天族の支援があるのを差し引いてもいくら何でも無茶が過ぎる。

「言いですか？穢れを浄化するのは導師として正しい行いです。ですが休むのも導師の大事な行いですわ、今後はもうこんなことは止めてくださいね」

「ライラの言う通りだよ、ミケル」

「テイガさんもですよ。お二人に言ってるんですから」

「…さ、戻ろう。ミューズも待ってるし」

「だな。戻る時刻をとつくに過ぎてしまったからな。今頃心配しているに違いない」

「もうちゃんと聞いてるんですかお二人共！」

テイガがミケルの旅に同行して数年以上の時が経過していた。

数々の憑魔や憑魔獣を浄化しながら世界中を回る旅路の途中で、彼らの関係は劇的に進展し親友と呼べるまでになった。

もちろんミケルだけでなく火の天族ライラやミケルの妹で人間のミューズとも同等の信頼関係を築き上げ、親しくなっている。

人間から導師になったミケルは例外として通常人間には天族の存在は感知できない。だが行動を共にするうちにミューズの霊応力が段階的に上がり、知覚遮断をせずとも天族を感じることが可能となった。

「全くもう兄さんもテイガもどうしてそうなの！」

ハイランド王国が統治する水の都レディレイクの宿でミケルとテイガを待っていたのは、ミューズからのありがたいお説教であった。

ミューズのお叱りを正座で萎縮して項垂れる人間と天族の絵面は天族が見える者からは奇妙かつ物珍しい光景だ。

ライラだけは免れているのは同じ女性だからという鼻屑目がかかっているのかそれとも別の理由からか、それはミューズ本人にしかわからない。

「すまんミューズ、ついすっかり忘れていたてしまつてな…」

「思いの外捗って勢いづじやったというか調子に乗っちゃったというか」

「ミューズ様さすがにもうよろしいのではないのでしょうか？ミケル様もテイガ様もこの通りちゃんと謝っておりますし」

「だーめ、散々人を待たせた挙げ句約束を忘れた人なんて知りません。せつかく初めてレディレイクで皆とお出かけしようと思つてたのに」

すっかり機嫌を損ねてしまった妹にどうすれば気を直して貰えるのか熟考するミケルとさすがのようにライラに目で救いを求めるテイガ。

そんな彼らに救いの手を差し出したのは他でもないミューズ自身だった。

「明日！今日約束破った代わりに明日は一日中付き合ってもらおうから、いい？」

その一言に二人は一気に窮屈な思いから解放され、快く返事を返す。

「もちろんだ。明日はお前の好きなようにしてくれ」

「本当にありがとうミューズ」

「よかったですわね」

今回は運が良かったが以後は気を付けなければならないと、この時
ミューズの恐ろしい説教が身に染みた二人は胸に誓った。

翌日、四人はレディレイクの街を散策した。

湖上の街と親しまれているだけあり街中には清らかな水が通い、
時々吹きすさぶ風が涼しさを人肌に与えてくる。

「はい、兄さん。これもよろしくね」

「あ、ああ」

長旅に欠かせない食料品を購入しミューズはミケルにその荷を預
け、るんるんと陽気に先頭を歩く。

先日ミケルらを待っている間にあらかた見て回っていたのか、初め
ての街にしては慣れた素振りです十字路を曲がる。

「えーと次は…」

「まだ…あるのか」

「あの調子だと夕方には荷物が倍以上になってると思う。うん、断言
できる」

「よろしければ持ちますわよミケル様？」

「いやこれぐらい平気だ…」

ティガとライラに持たせてもいいのだがあくまでもこの荷物は妹
の私物が八割を占めている。

そんな荷を天族にわざわざ持たせるわけにはいかない上、導師とし
でなく久々に人間の普通の兄として今日を送りたい。

だが何よりも根底にあるのは二人にも何の気兼ねもなしに、人間の街を満喫してもらいたいという望みだった。

「二人も何か気になる物があつたら金のことは気にせず遠慮なく言つてくれ」

「兄さんー遅いよー!」

「そう急かすな今行く」

数十メートル先から大声で呼びかけるミューズの元へミケルは荷物を落とさぬよう気を配りながら、歩行する。

導師とは離れた印象のその後ろ姿を見届けたライラは呟く。

「ミケル様、楽しそうですわ」

「ここ暫く野宿続きでこんな風にゆっくりできる時間なんてなかったからね」

「そうですわね、ミケル様とミューズ様あのお二人を見てると少し羨ましく思います」

「羨ましい?」

「はい。天族には家族はいませんから、もし家族がいたとしたらお二人のようになれたのではないかと思ひまして」

なるほど、とティガは相づちを打つ。

人間が天族に転生したと言う事案は耳にした覚えはあるが、天族は基本人間のように母親から生まれたりはしない。

そのために人間で言うところの家族のようなものはないし、いたとしてもそれは血の繋がりはなく、ただ家族のように仲が良いだけ程度に片付いてしまう。

ライラがそう思うのも仕方のないことなのだ。

「だつたらなつちやええばっ!」

「え?」

「頼めばミケルもミューズもたぶん喜ぶと思うよ。あの二人ライラのこと好きなんだし」

ティガの言葉の意味が理解できず困惑するライラであるが、慌てて言葉を紡いだ。

「ですがお二人が迷惑ではありませんか」

「二人はそんなこと思わないって」

「そうでしょうか？」

「うーんそんなに気になるなら直接聞いてみればいいんじゃない？よかったですら聞いておくけど」

ライラは眉を潜めて悩む。

無意識の内に人間と天族との壁を意識してしまい踏み出せないでいるのだろう。

ティガとしては自分などより付き合いも長いのだからそんなに臆病になる必要はないと思うのだが、本人がその気になるまでは無理強いをしても意味がない。

やはりライラが自分の口から言い出すまでは余計な手出しはしないとティガが決めた時、またミューズの声が街中に響く。

「何してるの二人共ー！」

ミューズの大声に周囲の人々が反応を示しちらりと彼女の視線を追うが、その方角には誰もいない。

その場に居合わせた人々はミューズを怪訝そうな目で一瞥し、自分の時間に戻る。

「行くかうか」

「はー」

空が夕暮れを迎える頃にはミケルの手荷物はティガの予想通り倍以上増え、ミケルの腕は限界に達しかけていた。

顔が荷物で隠れてしまう程に積み重なっているのでそうなるのも当然と言えば当然なのだが、ミューズの中で買ひ物はまだ終わっていないようだ。

「後は野菜と〜」

「ミューズ：さすがにもう限界だ：腕が疲れてきた」

「そうねえさすがにちよつと多すぎるか：兄さんたちは先に宿に帰っていいわよ。後はそんなにかさばらないし私一人で大丈夫だから」

「しかしお前一人だけでは危険だ。街中と言えども危険がないとも限らん、やはり私は残らせてもらう」

妹の身を案じての台詞なのだろうが、ふるふる小刻みに震える腕と必死に荷物を落とさぬよう堪えている顔で言われても説得力がない。そこで名乗りを挙げたのはティガだった。

「僕がミューズというよ。僕だったら一人でも憑魔を浄化できるし」

光を司る天族のティガなら導師でなくとも憑魔を浄化できる。

それにはないとは思うが憑魔獣が現れたとしても真っ先に対処できるため、ティガの申し出は最適な選択だ。

そう頭で飲み込んだミケルはライラを伴って一足先に宿へと帰って行った。

「すまない。では頼んだぞ」

「何かありましたらすぐ駆けつけますから」

ミケルとライラが場を去るとミューズはティガの腕を引っ張って、歩き出す。

「それじゃ行こっか」

「これは止めた方がいいんじゃないかなミュージズ。これだと端から見たら何も無いところを掴んでるように見えるよ」

「人目なんて気にしてたら導師の旅に付いて行くなんてやってられないでしょ。とにかく行くわよ」

「…は〜い」

生真面目な兄と自由奔放な妹。

同じ血の繋がった兄妹でどうしても違いがあるのか…つくづく人間は不思議だ。

そう思いながらティガはミュージズの買い物に随伴した。

「人間の女の子って皆ミュージズみたい買い物好きなの？」

「どうだろう、女の子でも買い物好きじゃないって子結構いるし皆が皆私みたいに買い物好きじゃないんじゃないかしら。でも女の子に限らず男の人にも買い物好きはいるわよ」

これ綺麗だな、と売り物のマグカップを眺めながらミュージズはティガの質問に答える。

「男の人でもそういう人いるんだ」

「そりやそうよ。特に身だしなみは男も女も関係なしに大事な趣味、いいえ使命なんだから」

「使命…？」

言い過ぎではないのかとティガは呆気にとられるも熱が入ったミュージズは、店員に怪しまれぬ程度に小声で熱弁する。

「年頃の男の子や女の子なんかはもう身だしなみをすっかりしないと生きていけないの。毎日毎日自分が着る洋服を選んだり、ちよつとし

たアクセサリーで普段と違う自分を他人に見せつけたりするのが成すべき使命なのよ…わかる？」

「まあ…うん、なんとなくわかる」

身だしなみなど食事に次いで無縁な天族にその重要性を説かれても困るのだが、人間の価値観ではミューズの理屈は正しいのだろう。

まだ胸に引っかかるところはあるものの無理矢理納得したティガは、あれと首を傾げる。

「でもそれだと何でミューズは最近同じ服ばかり着てるの？僕やライラは必要ないからともかく、ミューズとミケルには大事な使命なんでしょ？」

「う……」

ティガの一言にくりと首を落とすミューズ。

その仕草でティガは自分の今の一言が失言であったのをそれとなく察する。

「いい…兄さんと私は…もう年頃じゃないからいいの、もうそういう時期は終わったから…それに同じ服に見えても洗ってないわけじゃないから、旅の途中でも一日ごとに手で洗濯してるから…絶対に不潔なわけじゃないから……」

「わかった…ごめん、余計なこと言っただけ…」

「ほんとそういうデリカシーのないところ、誰に似たんだか」

静かながらも恐ろしい剣幕にたじたじになるティガにミューズはぶつぶつ小言を言いつつも、再び売り物を見分した。

ティガもこれといって欲しい物が無いが、何気なく売り物に目を通しているところある一つの商品に視線が止まる。

—そうだ

その商品を見てある考えが思い付いたティガはミューズにその考

えを伝える。

「—なんだけどいいかな？」

「当然、絶対喜ぶわよ」

「ありがとうミューズ」

「いいのいいの、私も気に入ったから。これは今日一番の買い物になったかもね…むふふふ、楽しみになってきたわ」

揃って楽しげに満面の笑みを浮かべる二人。

しかし店主には実質ミューズ一人しか見えておらず、買い物を終え立ち去ってから奇異な目を向けられていた。

一方その頃宿に戻ったミケルとライラは荷物を自分たちが取った部屋に置き、レディレイクの街外れの地下遺跡を訪れていた。

「やはりここに穢れが発生しているようだな。昨日からさつきまで気づかなかったとは情けない限りだよ…」

「おそらく今日の段階でここまで穢れが強くなったのでしよう。むしろ今気づけて幸いでした」

宿に戻った時ミケルとライラは強い穢れの気配を街の外から探知した。

邪魔になる荷物を置いて飛び出し森に隠された遺跡の入り口を発見し、そこから内部に侵入。

そして内部に進むとスライムを始めとする憑魔が襲いかかり、ミケルたちはこれらを撃破しながら遺跡の奥深くに進んでいるところだ。

「この先から強い穢れを感じる…気を抜くなライラ」

「いつでも大丈夫ですわ」

最奥とおぼしき扉を音を立てずゆっくり開けた途端、憑魔がこちらを捕捉し、目にも止まらぬ速さで襲いかかってきた。

俊敏な狼が憑魔と化したマーナガラムだ。

「くっ、素早い奴だ」

ミケルは懐より抜き放つと刀身で持ち上げるように振り上げ、マーナガラムの下顎を切り裂き先手を打つ。

速度が速い相手なだけに追撃はせず間合いを空けるのを優先したミケルはライラの名を呼ぶ。

「ライラ！」

「我が火は灼火！フォトンブレイズ！」

動きが鈍った隙にライラは炎熱を放出しマーナガラムに炎が上がる。

炎は自然には消えず鎮火しようとマーナガラムが走り回るが、その機動は初撃の速さを下回っている。

これぐらいならば一太刀入れるのもミケルには容易だ。

「虎牙破斬！」

一気に間合いを詰め斬り上げと斬り下ろしの二段斬りがマーナガラムの肉体を断絶した。

ライラの火属性の天響術の効果が重なりマーナガラムの穢れが浄化され、マーナガラムだったものは元の狼に戻り遺跡の外へ駆け出して行く。

「早急に処理できたおかげであれぐらいで済んだか…それよりこの遺跡まだ先があるようだな」

剣を鞘に納めミケルは更に奥を目指して暗がりを進む。

歩いて数分視界が当てにならず、ライラが炎を松明代わりに利用したことでようやく周囲の光景が鮮明にミケルの瞳に映る。

醜悪な悪魔のような化け物とそれを崇める人々が描かれた壁画と空間の中心で存在感を放つ祭壇。

そしてその無造作に散らばる人骨とハエがたかった多数の衣服、それら全てがミケルとライラの目を釘付けにする。

「何なんだ？人骨が何故こんな遺跡の奥深くに？先の憑魔の仕業というわけではないだろうか」

「生け贄…でしょうか…」

「心当たりがあるのかライラ」

「いえ、ですが噂に聞いたことがあります。天族を忌み嫌う一部の人たちが邪教を創設し邪神を召喚するために生け贄を捧げた」と

「それが本当ならばこの骨はその生け贄の成れの果てということか…酷い真似をする。穢れが満ちるのも当然だな」

腐敗臭にミケルは鼻を曲げながらも、この光景を生み出した者に悪態をつく。

「だが何故今日になって穢れを感知できなかった？」

「何らかの要因が影響していたのではないでしょうか？この遺跡に係した何かが反応して穢れが増大したとか…」

「…：今はここを出よう。せめて犠牲なった者たちが救われるよう祈りだけでも捧げていこう」

そう言つてミケルとライラは供養の祈りを行い、足早に出口で足を向ける。

この時青い靈魂のような不可視の球体がライラの体に吸い込まれるように入ったのだが、ライラとミケルどちらもそれに気づくことも違和感を覚えることもなく遺跡を出た。